

## 石棺の出現とその意義

和田 晴 吾

### はじめに

本日の私の話は、古墳時代の石棺についてです。

本題に入る前に、この博物館の名前ともなっている二上山についての思い出を少し話させていただきます。私は奈良生まれの奈良育ちで、途中十数年ほどは県外に出ていましたが、今はまた元にもどってきました、奈良に住んでおります。

ところで、奈良盆地をとり囲む山々と言いますと、古くから神さまが住んでいる山がたくさんあるわけですが、なかでもこの二上山と、ちょうど盆地の東の反対側にある三輪山とは特別な山かと思えます。私の家は盆地の北の方の佐保・佐紀丘陵、いわゆる平城山（ならやま）の一角にあるわけですが、三輪山とは幼いころからなじみが深く、時々祖父に連れられてお参りにまいりました。特にお正月には三輪山へ行きまして、適当な木を見つけ、この木は決まっていたのかも知れませんが、その木に注連縄を張り巡らし、餅やミカンや卵などをお供えしてきたものです。そのころは山頂へも自由に登れて、磐座らしい大きな岩がゴロゴロしていたのを覚えています。今でも、両親は一ヶ月か二ヶ月に一度はお参りに行き、たこ焼きを買って帰ってきます。三輪山を崇めたという、奈良盆地の昔からの人々

の心情が、私の中にも少しは残っていきそうです。

それに対し、二上山の方は、あまりなじみのない山でした。小学生のころに北側の屯鶴峯へ遠足に来た微かな記憶があるだけです。二上山が心に掛かる山となりましたのは、大学に入ってからのことです。まず最初に折口信夫の『死者の書』を読んで強い感銘を受けました。これは山裾の当麻寺に伝わる曼陀羅にまつわる中将姫伝説が題材になっ  
ていまして、実に美しい文体で書かれています。それを読んでからは気になる山になって、お正月に登ったりなんかしました。何かの因縁でしょうか、後ほど石材を加工する技術の話をしませんが、その技術の復元に、この曼陀羅に  
関連する『当麻曼陀羅縁起絵巻』を使うことになりました。その後、考古学研究会に入り、その活動の中で二上山周辺  
に来てはサヌカイトをリュックサックいっぱい持ち帰り、石器作りをするようになりました。ご存じのとおり、二上  
山周辺で採れるサヌカイトは、非常に硬質で貝殻状に割れ、鋭い刃を形成しますので、後期旧石器時代から弥生時代  
まで、槍先とか弓矢の鏃とかを作る材料として盛んに用いられました。この二上山博物館が一番得意とされている分  
野の一つで、展示も充実しています。ちなみに、私たちの石器作りはさんざんなもので、危険な破片をあたり一面に  
散らかしただけです。一度社会的伝統を断たれた技術は容易には復活しません。

その後、古墳時代の勉強を始め、石棺と言う、石で作った棺の研究をするようになってからは、二上山との距離は  
さらに縮まり、何度も足を運ぶようになりました。二上山やその周辺で採れる白色の凝灰岩を使って、六、七世紀に  
は多くの家形石棺が作られたからです。また、「松香石」とも呼ばれたこの凝灰岩は、その後の奈良・平安時代にも石  
造物の材料や建築用材などとして盛んに用いられました。周辺には何力所も、かつての石切場の跡が残っています。

今日は、その中から古墳時代の石棺を選んで話をさせていただきます。どうして石なんかで棺が作られたのか。遺  
体を入れて持ち運べたのか。重さが数トンもあるのにどうして遠方に持ち運ばれたのか。石棺を研究するなどのよう  
なことが分かるのか、などといったことについてです。

## 一 石棺の種類と時期

それでは最初に、石棺の種類について簡単に説明します(図1)。まず、石棺を分類するにあたっては、棺の身の部分を、一石を削りぬいて作っているか、組み合わせで作っているかで区分し、刳拔式石棺と組合式石棺とします。つぎに、その形態からいろいろと呼び分けれます。竹を縦に削って蓋と身にしたような形のは割竹形石棺と言います。これは木棺を真似たもので、割竹形木棺は、大木の上下を切り取り、中間部分を縦割りにして、内部を削りぬいて作ったものです。したがって、割竹形木棺や石棺の横断面は正円に近く、両端は上下にスパツと切り取られたようになってるのが特徴です。断面が楕円形になったり、両端が丸く立ち上がるようになってくるものは、舟の形に似ていると言つことで、舟形石棺と呼びます。必ずしも舟を真似ているというわけではありません。一方、組合式石棺では、身は箱形で、蓋も板状のものを箱形石棺と呼んでおきます。長持形石棺というのは、そのうちの蓋石が蒲鋒状になっていて、昔の家財道具や衣装をいれる長持に似ているところから、その名が付きました。家形石棺は文字通り、蓋が屋根形、身は箱形のもので、身には刳拔式のもの、組合式のものがあります。現在日本には、割竹形・舟形石棺が二〇〇基余り、長持形石棺が推測も加えて約四〇基、家形石棺が約六五〇基ほど知られています。これが、これに箱形石棺や未発見のものなども加えると、その数は優に一〇〇〇基を越えるほどになるかと思えます。

石棺が出現してくるのは、古墳時代前期後半です。刳拔式では、まず割竹形石棺、そして、あまり時間差なく舟形石棺が作り出されます。割竹形石棺はおもに香川県で作られました。ここでは前期いっぱいで作られなくなり、舟形石棺は中期から一部は後期前半にかけて、九州の熊本・佐賀・宮崎、あるいは島根、福井、群馬、茨城などで作られました。組合式では、割竹形石棺とほぼ同じころに、長持形石棺の祖形とも言えるような箱形石棺が作り出され、中期には畿内を中心に長持形石棺が発達します。家形石棺は大きく畿内系と九州系と出雲系に区分できます。

が、畿内系のものは古墳時代後期から飛鳥時代に発達し、主要な古墳の横穴式石室内で用いられました。

なお、石棺には箱式石棺という、おもに自然の板石を組み合わせただけの、多くは底石もない簡便なものもあります。縄文時代後・晩期の東日本でも用いられましたが、弥生時代以降のものは、本格的な水稻農耕文化といっしょに伝わってきて、古墳時代や飛鳥時代まで用いられました。しかし、ここでは、それらを除いた、大型の本格的な石棺を中心に話をします。それらの石棺は、長さは二、三メートル、重さは数トンもあるものです。

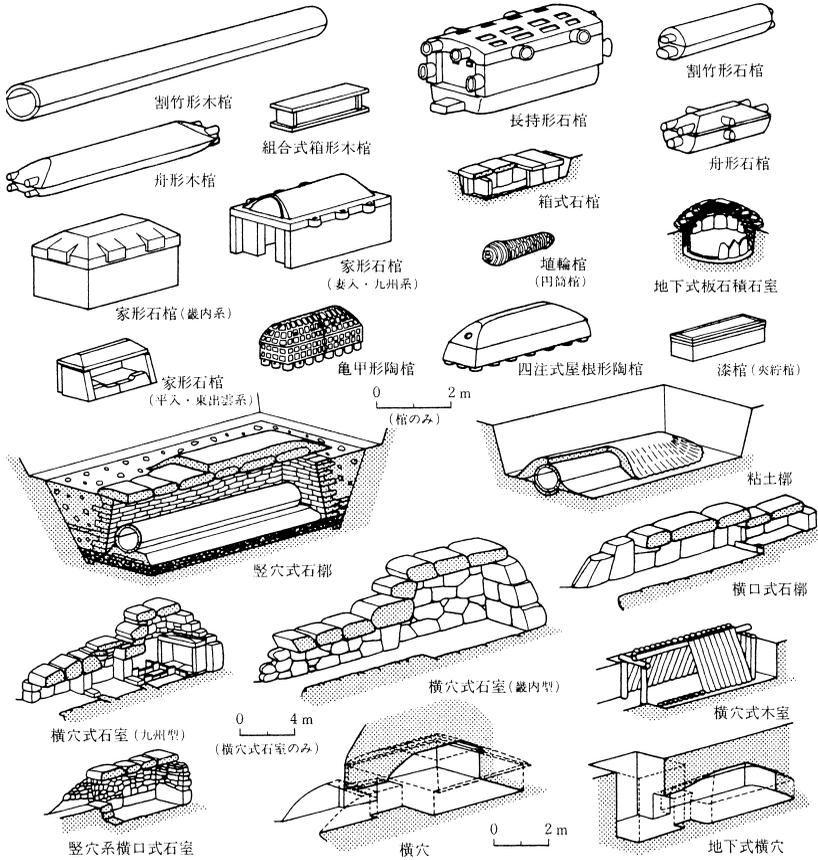
このように大型で本格的な石棺は、日本だけではなく、世界各地にあります。エジプトにもありますし、ギリシャやローマでも盛んに用いられました。中国でも、数は多くないようですが、存在しますし、南方のミクロネシアにもあります。しかし、古墳時代の石棺は、それらとは別の系譜のもので、列島独自に発達したものと思われます。日本史全体のなかでも非常に得意な存在です。石棺は、古墳と盛衰をともした、まさに古墳時代的なものの代表とすることができるとでしょう。それだけに、石棺の出現とその意義を考えると言うことは、古墳の本質、あるいは古墳時代の社会や文化の特質を考える上で、非常に重要な課題と言えます。

## 二 石棺出現の背景

では、なぜ、わざわざ大きな石を加工して重い石の棺を作ったのでしょうか。

### (一) 荘厳な棺

まず第一に考えられることは、大きくて荘厳な棺を作ろうとしたと思われることです。前方後円墳をはじめとする古墳は、弥生時代の各地の墳丘墓に備わっていた諸要素に新しい要素を加えつつ、それぞれを一段と象徴化・荘厳化・巨大化・隔絶化することによって創り出されたと考えられますが、その傾向は古墳成立後も持続され、古墳時代中期の大阪府大山古墳という巨大な前方後円墳を生みだすまでに至りました。その中で、棺としては、まず初めに長



時期	棺と埋葬施設	棺										槨		室								
		箱式石棺	組合式箱形木棺	割竹形舟形木棺	割竹形舟形石棺	長持形石棺	家形石棺(畿内)	家形石棺(九州)	家形石棺(出雲)	地輪棺	亀甲形陶棺	四注式屋根形陶棺	漆棺	竖穴式石棺	粘土槨	横口式石槨	竖穴系横口式石室	横穴式石室(九州)	横穴式石室(畿内)	横穴式木室	横穴	地下式横穴
弥生時代																						
古墳時代	前期																					
	中期																					
	後期																					
飛鳥時代	終末期																					

図1 古墳時代の棺・槨・室とその変遷

さくハメートルもある長大な割竹形木棺が作り出され、続いて前期後半には石棺が生み出されました。ともに巨大で荘厳な棺を目指したものと思われれます。

(二)不朽の「閉ざされた棺」

しかし、棺の用材として石を選んだ本当の理由は外にありそうです。古墳が出現してくるのは、日本列島に本格的な水稻農耕社会が定着し、その社会が一定の政治的成熟を見せ、畿内を中心とした初期的な国家が形成されだす段階です。そして、その実現に際しては、列島社会内部の自律的な展開だけではなく、中国や朝鮮半島からの強い政治的、文化的影響があつたものと推測されます。葬送に関しても同様で、前期古墳から数多く出土する神獸鏡の図像に見られるような神仙思想や、それと深く関連する辟邪の思想が、この時に流入してきたものと考えられています。

私もその意見に賛成なのですが、私は、特に、この時に受容され、古墳時代の前・中期に発展した「槨」こそが、当時の死生観を象徴的に表している遺構であると考えています。埋葬に関わる施設類を「棺」・「槨」・「室」という概念で整理しますと、「棺」は遺体を入れる容器、またはそれに準じるものを指します。「槨」は、この棺を保護する施設、またはそれに準じるものです。そして、「室」は独自の空間である部屋（玄室）とそこに至る通路（羨道）を備えた施設で、部屋の空間は棺を納めたり、儀礼を行ったり、多様に用いられます。そこで、この概念を用いて、弥生時代から古墳時代の埋葬施設類を整理しますと、弥生時代は「棺の時代」、古墳時代前・中期は「（竪穴系の）槨の時代」、後期は「室の時代」と言うことができず。すなわち、「槨」は、弥生時代の後期に入ってきて、古墳時代前・中期に発展した施設で、この時もたらされた葬送の思想、死生観はこの「槨」と深く関わっていると考えられるのです。

前・中期古墳の「槨」とは竪穴式石槨や粘土槨のことを指しますが、ここでは、遺体を納めた棺は石や粘土で入念に密封されていることが分かります。また、「槨」を築いていく段階で所々に鉄鏃や刀剣類など鉄製の利器が埋め込まれていますし、「槨」の内外面にはベンガラなどの赤い顔料が塗られています。こういった行為は、いずれも遺

体に邪悪なものが寄りつくのを防ぐためのものかと思われれます。ですから、「槨」は辟邪のための装置と言えるでしょう。しかし、視点をかえると、それは遺体に邪悪なものが寄りついて暴れ出てくるのを防ぐ装置とも言えます。鏡を数多く納めるのもこれと関連があるかと思えます。なぜなら、鏡は首長の政治的・宗教的権威のシンボルであるばかりではなく、邪悪なものの正体を映し出し、それが寄りつくのを防いだり、暴れ出すのを防いだりする力があると考えられていたからです。副葬品にも荒ぶる魂を鎮めるために入れたと思われるものがあります。

ところで、「槨」は、中国では、すでに新石器時代後半には出現し、商、周、春秋、戦国と多様な展開をとげ、漢代にも残ります。一方、「室」は前漢代（前二一―一〇）後八年）に出現し、後漢代（後二五―二二〇年）には帝国の周辺地域にまで広がります。日本や朝鮮半島の「槨」や「室」の淵源は中国にあるのです。ただ、日本列島にはすぐには伝わらず、竪穴式石槨は一世紀頃の弥生後期、横穴式石室は九州北部で四世紀後葉の古墳中期初頭、畿内では五世紀後葉の後期初頭頃に入ってきました。そこで、まさに「槨の時代」であった中国の戦国時代（前四〇三―前二二一年）の死生観を見てみますと、幸い中国では当時の文献が残っています。それによると、「人の死とは魂と魄の結合が解体されることで、肉体的な要素である魄は地に帰って鬼魂となるの対して、精神的要素である魂は天に昇って祖霊となる」と理解されていた、と言われています<sup>①</sup>。

このような死生観に、先に上げた竪穴式石槨や粘土槨の特徴を加えて判断しますと、「槨」とはまさに「魄」を密封する装置で、副葬品も加えて、遺体である「魄」に邪悪なものを近づけず、「鬼魂」が暴れ出さないよう鎮魂し密封するためのものだったと判断できます。中国の戦国時代に発達した「槨」の思想がそのままの形で入ってきたとは言いません。時期差や地域差もあります。「槨」自体も、戦国や漢の複雑に発達したものに比べれば、竪穴式石槨や粘土槨は、ほとんど棺を覆うだけのシンプルなものですが、したがって、列島の「槨の時代」には、素朴な魂魄の思想を背景に、昇天する「魂」と、埋葬施設の中に密封される「魄（遺体）」を想定するのがもつとも妥当かと思われるま

す。そして、「柳」だけでは足りずに、永遠に腐ることのない石でもって「魄」を、遺体を、密封する容器として作り出されたのが石棺であった、と考えます。石棺は直接埋められたものも少なくありませんが、本来は竪穴式石槨内に安置されるのが原則でした。私はこのような棺を「閉ざされた棺」と呼んでいます。

ちなみに、古墳の墳丘に立て並べられた埴輪は、周濠とともに、古墳という聖域を区画し、威儀をただし、邪悪なもの進入を防ぐ装置であったと考えられます。器台や壺に起源をもつ円筒埴輪、朝顔形埴輪、あるいは壺形埴輪については、奈良大学の水野正好先生が、『播磨国風土記』の説話などを引きつつ、境界に埋められた壺なり甕は、外より寄り来る神々や霊を境界の地にて丁寧（ていねい）に御饗えし、ねがわくは事なくおひきとり願うという論理に基づくもので、「幾重にもめぐらされた円筒埴輪列の囲みに、寄り来るもの、しのびよるものを、三段構え、四段構えで御饗えし、内に至らしめることなく追い帰そうとする論理が貫徹している」と述べられています<sup>②</sup>。また、やや遅れて出現してくる蓋、盾、鞞、刀剣、甲冑などの器材形埴輪は、いずれ威儀をただすものであるとともに、防御のためのものでもあります。古墳の外部施設は辟邪、内部施設は鎮魂と密封というのが基本であったと考えています。

天に昇って祖霊となるとされる「魂」についてはなかなか分かりません。埴輪群の中心に据えられた家形埴輪群や、天上世界へ魂を運ぶとも言われる鳥形埴輪や舟形埴輪などの適切な評価が必要です。祖霊祭祀が行われたのが、古墳の場だけで終わったのかというようなことも大きな問題です。古墳では、埴輪の樹立も終わった後の段階にも儀礼の痕跡があります。墳丘の頂部や裾に残された決して多くはない土器群です。墳頂部の土器群は、方形埴輪列の外側で発見される場合が多く、その儀礼の対象は方形区画内の家形埴輪群のように見えます。兵庫県のある行者塚古墳の造出での儀礼の対象も家形埴輪でした。この家形埴輪群の前での土器を使った儀礼は古墳における最後の儀礼かと思われるかもしれません。それが昇天する亡き首長の魂を送る儀礼なのか、あるいは亡き首長の霊を新しい首長が継承する儀礼なのかは判断の難しいところです。しかし、いずれにしても、決して多くはない土器群が暗示する儀礼ですが、埴輪樹立後にお

こなわれたこの最後の儀礼は重要な意味をもっていたことにまちがいはないようです。そして、それ以降は、人々が古墳へやってきて定期的な祭祀、あるいは定期的でなくても継続的な祭祀を行った跡はほとんど認められなくなります。以降の首長霊、あるいは祖霊の祭祀は他の場所、たとえば、首長の居館や神社などで行われたのかもしれない。

(三) 石工技術の伝来

では、大きな石材を自由に加工して目的にあった石棺を作る技術は、当時の日本列島にあったのでしょうか。石材の大きさを問わず、石を加工するというだけでしたら、旧石器時代以来、列島には石器を製作する技術が存在しました。しかし、長さが二メートルも三メートルもあるような大型の石材を加工する技術は弥生時代以前にはありませんでした。当時の石工技術がどのようなものであったかは、利用した石材と、石棺の表面に残された工具の痕跡からある程度復元することができます。石工の技術には、石材を取り出す「山取り」、段階の技法から「粗造り」、「仕上げ」、「磨き」の各段階にいたるまでの各種の技法がありますが、石棺の表面には「仕上げ」、段階の工具痕がよく残っています。先の尖った工具で叩いた痕跡、刃のある工具で叩いた痕跡、刃のある工具で削った痕跡などがあり、それぞれに粗いものから細かくて丁寧なものまでがあります(図2)。それらを現在の民俗例や江戸時代の『日本山海名産図絵』の例、あるいは鎌倉時代の、先に話しました『当麻曼陀羅縁起絵巻』の例などと、作業工程ごとに比較したのが図3です。

このようにして、当時の技術を調べますと、石工技術は二回にわたって列島に入ってきたことが分かります。まず最初に、大型の石材を加工できる技術が伝わってきたのは古墳時代の初めごろです。奈良県箸墓古墳を思い描いていただけでは分かることなのですが、巨大な前方後円墳を左右対称の精美な立体に造り上げるには、これまでにない優れた新しい土木技術が中国、あるいは朝鮮半島から入ってきたものと思われれますが、それらの技術群の中に大型石材を扱った石工技術も含まれていたのではないかと考えています。ただ、この技術は、最初は竪穴式石槨の天井石の一部を加工する程度にしか用いられていなかったのですが、古墳時代前期後半に入りますと、その技術を用いて石棺が盛んに作られる

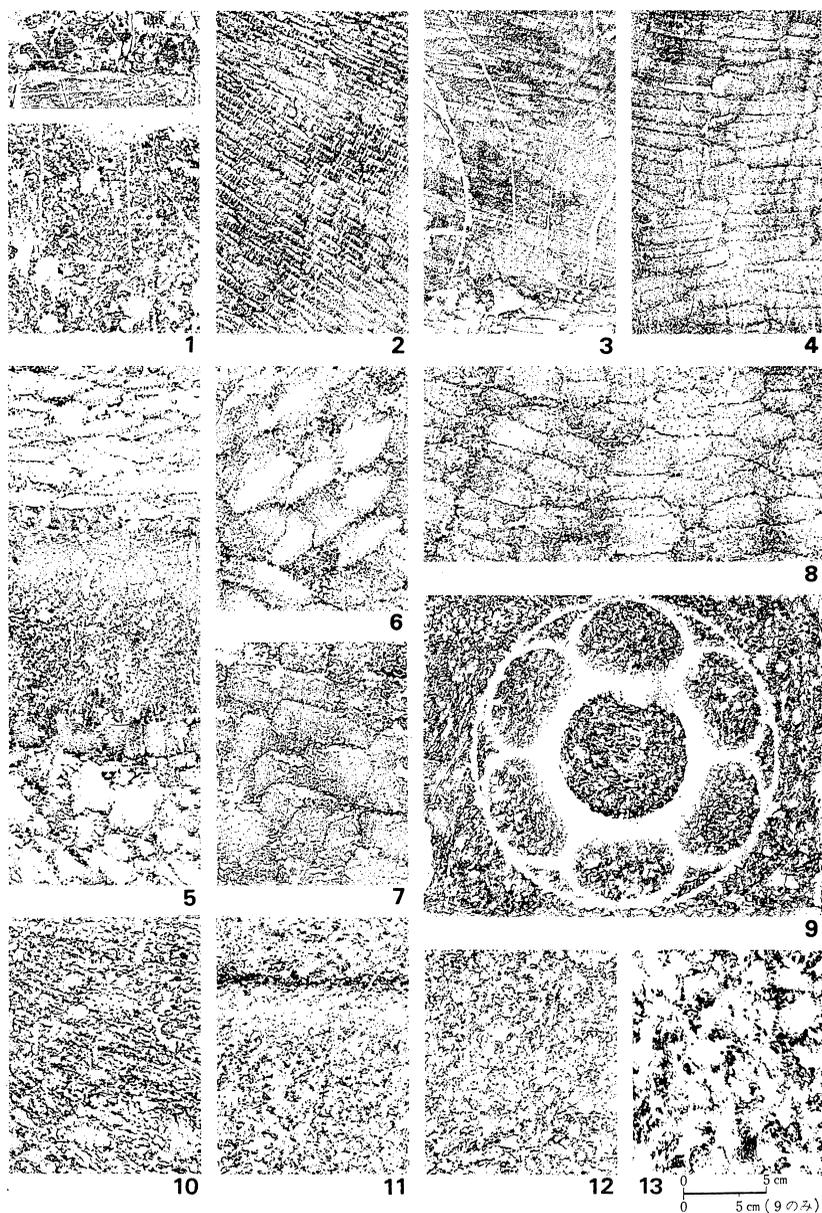


図2 石棺表面の工具痕(1 - 6 : 福井県舟形石棺、他は奈良県家形石棺)

1 : 御野山古墳 2 : 龍ヶ岡古墳 3 : 山頂古墳 4 : 宝石山古墳 5 : 泰遠寺山古墳(上より身内面・上端面・外面) 6 : 春日山古墳 7 : 権現堂古墳1号棺 8 : 東乗鞍古墳1号棺 9 : 水泥古墳2号棺 10 : 艸墓古墳 11 : 西宮古墳石棺 12 : 同石室 13 : 同石棺底部外面

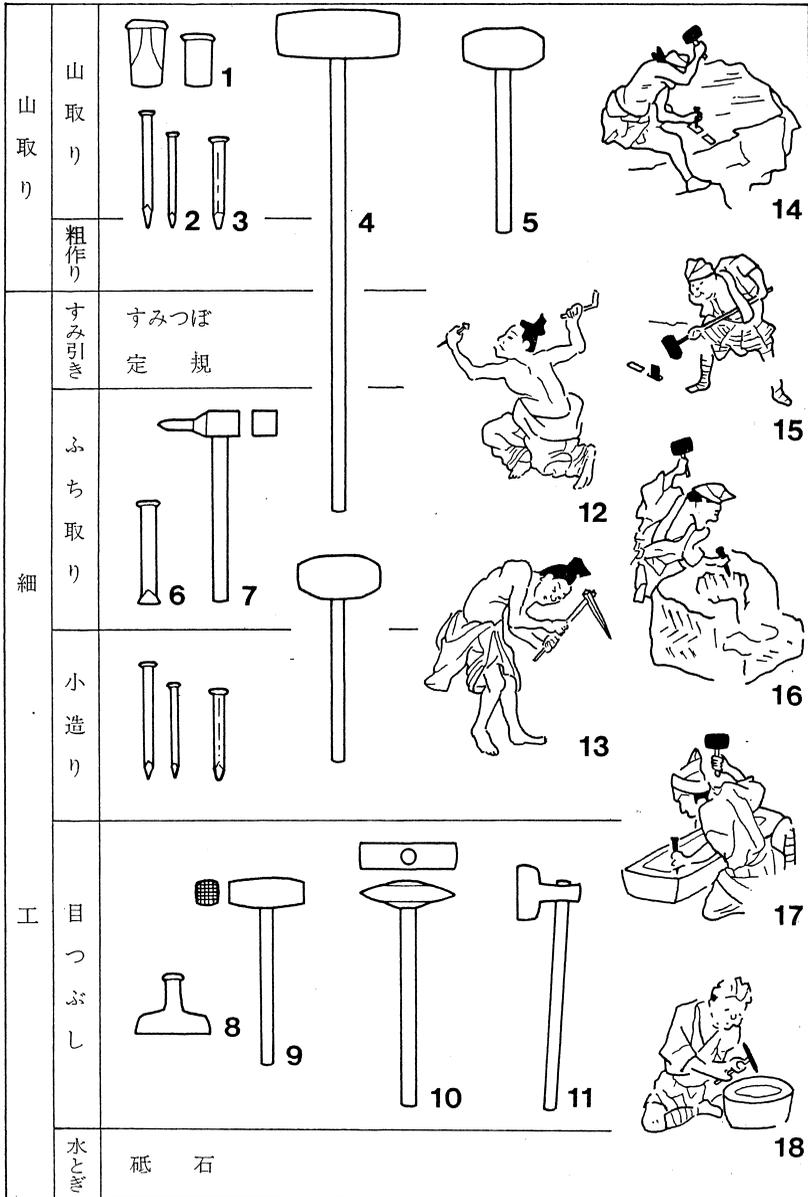


図3 石土の作業工程と工具  
 (新潟県佐渡相川の事例。12・13は『当麻曼荼羅  
 縁起絵巻』、14~18は『日本山海名産図絵』より。)

よようになるのです。この技術は素朴ですが、一つの体系をもった技術で、柔らかい凝灰岩も、硬い花崗岩も扱うことができました。しかし、この技術を使って加工したのはほとんど石棺のみだったせいもあって、石棺作りに適した柔らかい石が用いられるようになると、急速にその技術は衰退していききました。二上山の白い凝灰岩が開発された六世紀には、竜山石などの一部の硬い石材を除けば、ほとんどが柔らかい石のみを用いるようになっていました。古墳時代には新しい技術が入ってきて、石工の思い通りに何でも自由に作られたわけではなく、首長の意志のもとに特定のもの加工だけにその技術は使われたのです。それが技術が退化する大きな理由でした。

二回目の技術は、六世紀の終わりころから七世紀の初め、飛鳥寺時代の始めころに、仏教をはじめとする新しい文化とともにもたらされました。この時には寺院や宮殿、庭園などを造る土木建築の最新技術が伝わってきたのですが、その中に新しい石工技術も入っていたわけです。皆さんが飛鳥の方へ行かれますと、花崗岩を処理しているんな石造物をご覧になるかと思いますが、それらはいずれもこの新しく入ってきた技術によって作られたもので、それがまた、古墳の横穴式石室や石棺の製作にも用いられたのです。

ですから、古墳時代の前期には、石棺を作る条件が思想的にも技術的にも整っていたと言つことができます。

ちなみに、重さが数トンもあるものをどうして運ぶことができたのかということですが、修羅という運搬具が見つかっています。大阪府藤井寺市の仲津山古墳（伝仲姫皇后陵）の南側に三ツ塚という三基の方墳があり、その東端の八島塚と真ん中の中山塚の間から二つの修羅が発見されました（図4）。大型のものは長さ約八、ハメートル、小型のものは約二、ハメートル。現在は大阪府立近つ飛鳥博物館に展示されています。同じようなものは京都市の金閣寺の池からも発見されています。室町時代のもので、地上を引っ張ったせいで、表面が極端にすり減っています。また、大阪府の瓜生堂遺跡から出土した須恵器の壺の破片には、馬が修羅を引く絵がへらで描かれています（図5）。六世紀前半のものです。地上でものを運ぶのに修羅が使われたことがよく分かります。二上山の石材が石棺材として開

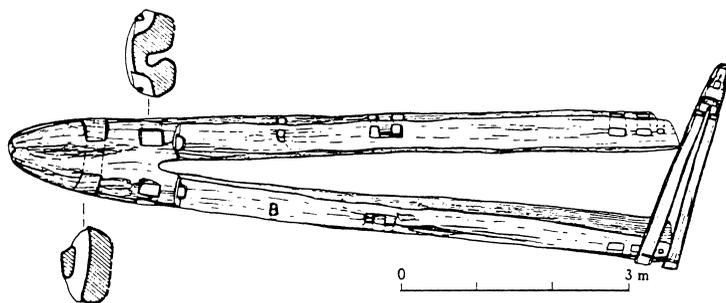


図4 大阪府三ツ塚古墳出土の修羅

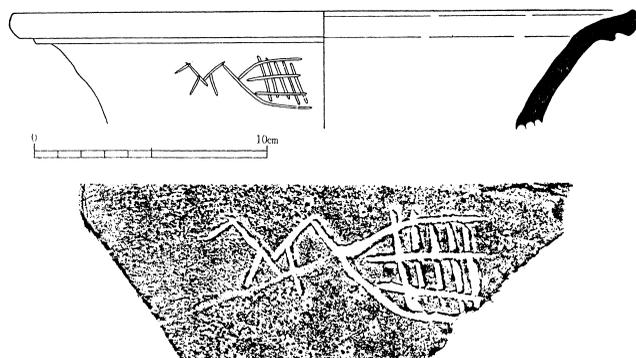


図5 大阪府瓜生堂遺跡出土の修羅を引く馬の絵

発されだすのは六世紀前葉のことですが、その時には、石材の搬出のために道をつけ、滑りをよくするために丸太を敷きならべ、その上に石材を積んだ修羅を乗せて大勢の人々が、時には馬も加えて、引つ張ったものと思います。有名な竹内街道などのものは、このような石材搬出ルートであった可能性が高いと考えています。兵庫県の新加古川右岸で採れる竜山石の石棺も奈良盆地に運び込まれていますので、大和川の整備も同時に行われたのでしょうか。

(四)「据えつける棺」

以上のように話を進めてきましたが、それでもなお不思議なのは、棺の用い方です。現在、棺と言えば、遺体を入れて葬儀の祭壇に置かれ、それが終わると墓地や火葬場に持ちはこばれます。では、石棺にも遺体を入れて古墳に持ちこんでいったのでしょうか。とても不可能です。ですから、石棺は棺ではなく、その中に別の棺が入っていて、石棺は「柳」だったという意見もありました。しかし、石棺には枕を彫りだしたのも少なくありませんし、内部から別の棺が出土した例もありません。人骨が残っていても木棺等の痕跡はないのです。そこで、古墳における埋葬手続きを検討してみると、どうも古墳時代の棺は遺体を入れて持ちこぶのではなく、墓穴（墓坑）のなかに据えつけておいて、そこに遺体を板などに乗せて持ってきて、そして棺に納めるという使い方をしていたのではないかと推測されます。このような使い方の棺を「据えつける棺」と呼んでいます。

古墳時代前期の畿内の竪穴式石柳の典型的なものの場合を説明しますと、まず、前方後円形の墳丘を造り、その後円部の頂上に墓坑を掘ります。本格的なものは二段に掘られていて、深さは三、四メートルもあります。そして、墓坑の底に礫を敷き、棺を置く粘土の台を造ります。これを粘土床と呼びます。続いて、粘土床の上に棺の身を置き、そのまわりに板石をほぼ棺の身の高さまで積み上げます。これが竪穴式石柳の下部になります。これで納棺儀礼の舞台が整ったわけです。そこで、遺体を墓坑内に運び込み、棺内に納め、各種の副葬品を棺内や棺と石柳の間の隙間に配します。この段階が古墳での埋葬儀礼のクライマックスで、そこでは大きな墓坑と長大な木棺とが必要とされたも

のと思われれます。そして、棺の蓋をしてからは石槨の上部を造り天井石を架け、最後に粘土で全体を覆って、墓坑全体を埋めもどしたのです。この一連の手順は、弥生時代以来の「据えつける棺」という棺の性格にあわせたものと言うことができます。

では、現在のように遺体を入れて持ちはこぶ棺、これを「持ちはこぶ棺」と呼んでいます。それはいつから始まったのでしょうか。それは飛鳥時代からのことです。ちょうどこの時期は仏教をはじめとする新しい文化が入ってきて、文化が革新される段階ですが、葬法の上でも大きな変化があつたのです。すこし後になります。高松塚古墳で出土したような漆塗りの木棺がそれに当たります。また、石槨の短辺側に口が開いていて、そこから遺体を入れた棺を挿入する横口式石槨もこの棺といつしよに入ってきて、七世紀の古墳に用いられました(図1)。釘を打ち付けた組合式木棺では、それまで一〇〜二〇センチメートルもあつた大型の釘が一〇センチ以下の小型品になるのも、棺が「持ちはこぶ棺」となつて、棺の板を薄くして軽量化を図つた結果です。

以上、石棺の出現は、荘厳な棺の要求、遺体(魄)を密封する思想、大型石材を加工する技術の出現、「据えつける棺」という棺の用い方などが合わさつて、初めて可能となつたといつことでもあります。

### 三、「閉ざされた棺」と「開かれた棺」

最後に、この石棺が、古墳時代後期になつて、横穴式石室の内部に安置されるようになってくるのか、という話をします。

近畿地方の横穴式石室はずいぶん盗掘されていますので、山辺の道や飛鳥あたりを歩いていても、いくつかの石室に入るができます。例えば山辺の道ですと、天理市の東乗鞍古墳。そこでは石室の中に入り、なかに置かれた家形石棺を見ることができます。この石棺の内外面には赤い顔料が塗られていて、以前は天上から落ちる水の滴に表面

が洗われ、あざやかな赤色を呈していました。懐中電灯で照らしますと、闇のなかにみごとな赤。まさに古代の色でした。明日香村でしたら都塚古墳、橿原市では小谷古墳などがそうです。このように畿内の有力な古墳では、多くの場合、横穴式石室には大きな家形石棺が入っています。斑鳩町の藤ノ木古墳もそうで、横穴式石室内の家形石棺は身に蓋がきつちりと被さり、しっかりと密封されているのです。要するに、畿内では、古墳時代後期になって横穴式石室のなかに家形石棺が置かれるようになって、棺は前・中期のそれと同様に「閉ざされた棺」のままなのです。したがって、横穴式石室の玄室の内部は棺置き場のような性格が強いということができます。また、石室は羨道の部分でモ石と土とで閉塞されていますから、遺体（魄）は「棺」と「室」とで二重に密封されているのです。

なぜ、こんなことを言うのかといえますと、横穴式石室のなかに石棺が入ると、その場合は組合式家形石棺なのですが、石棺を構成する部材が少なくなっただけで、石室内に入ると安置されている遺体が見えるような、そんな地域もあるからです。それは九州の、特に有明海沿岸、熊本県を中心とした地域です。ここでは、六世紀になると、横穴式石室の奥壁にそうかたちで組合式家形石棺が配置されるようになりますが、その家形石棺の石室内内部に向く側には長側石がないのです。平入り横口式家形石棺というのですが、その中に遺体は横たえられます（図6）。ですから石室に入りますと、自ずと横たわる遺体が見えるわけです。このような施設を「石屋形」とも呼びますが、後には、屋根形の蓋石は板状のものとなり、遺体を置く台としての「屍床」が造られるようになります。なかには遺体にあわせた形、すなわち人形に窪みを彫りこんだ屍床もできます。ここではこれらを「開かれた棺」と呼びます。

要するに、畿内では、古墳時代後期になって横穴式石室が造られるようになって、そこで用いられた棺は前期以来の「閉ざされた棺」のままだったわけですが、九州では横穴式石室のなかでは石屋形や屍床といった「開かれた棺」が発達したわけです。したがって、両者の横穴式石室の内部空間の意味には大きな差がでてきます。畿内の横穴式石室の玄室空間は棺置き場の性格が強かったのに対し、九州の横穴式石室のそれは死者の魂が自由に浮遊できる空間だ

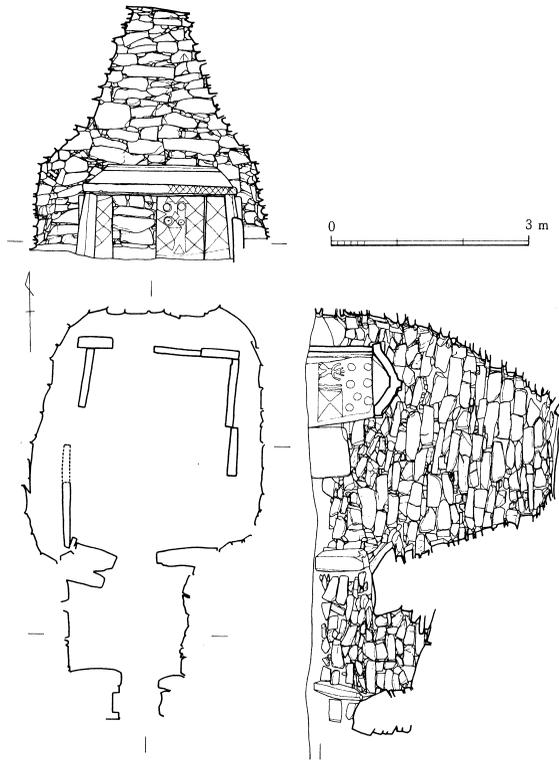


図6 熊本県チブサン古墳の横穴式石室と石屋形

つたと言えるでしょう。畿内では魄を石棺に密封し、さらに石室の入口で封じました。その意味では畿内の石室は槨的とも言えます。それに対し、九州では家形石棺は「魄の家」のようなもので、魄は家形石棺を抜け出し、玄室空間を自由に動けたわけです。そして、ここでは、魄は石室のレベルで封じ込められたわけです。

ここで思い出していたきたいのは、九州では装飾古墳が発達することです。装飾古墳と言いますが、いくつかの種類がありますが、ここで思い出していたきたいのは横穴式石室内部の壁や石屋形に赤、黄、緑、青などの顔料で彩色する様式のもです。最初の頃の丸や三角の幾何学文は、盾などとともに、魄を石室内部に封じ込めるためのものだったと思われませんが、

後には魂の行方と関連しそうな人や馬や舟などが出てまいります。このような石室内部の壁画は畿内の横穴式石室には見られないものです。たぶん、「閉ざされた棺」・「開かれた棺」という石棺の性格の差に由来する横穴式石室の内部空間の意味の差が、そこに反映しているのでしょう。

日本列島の広い範囲で発達する横穴式石室は九州系のもものと畿内系のもの、およびその折衷系・変容系のものに大きく区分できます。これまでは形態や石材の使い方などからそれらを区別してきたのですが、今話したようなことを深めていくと、より本質的な差異が見えてくるものと思われれます。

### おわりに

石棺の最大の長所は腐らないと言うことです。作られた石棺が粉々にされないかぎり、その姿をとどめています。その石棺を「祭祀の道具」という観点からいろいろと検討しますと以上のようなことが分かりました。

石棺の第二の特徴は、各地でそれぞれ在地の石材を用いて作られ、それが形や分布に反映しているということです。したがって、石棺を見れば、それがいつ、どこで作られたものかが分かります。そうしますと、特定の石切場の周辺にはその石材をもちいた特定の形態の石棺が分布していることも判明します。その範囲はだいたい律令国の二分の一から四分の一程度の範囲で、その範囲のなかのいくつかの古墳群、言い換えましたら何人も首長層に共通して用いられています。石棺は首長専用の棺なのです。古墳時代は同族社会であった。血縁関係や、その延長上にある婚姻関係といった同族的な関係が社会を律する有力な原理であった時代であると考えていますが、そのような社会にあって、棺は、その素材や形態が同族ごとに決まっていたものと考えられます。したがって、「政治の道具」という観点から見ても、石棺の研究は古墳時代の集団や集団関係を分析する上できわめて重要なものであります。今回はその点については触れられませんが、それはまたの機会に譲りたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

この稿は、一九九五年五月四日に奈良県香芝市立二上山博物館で行われた第七回特別展記念シンポジウム『二上山麓の石が語る世界 箸墓から高松塚まで』において報告したものに若干手をいれたものです。掲載にあたっては二上山博物館の石野博信先生・佐藤良二さんのご許可をいただいた。厚くお礼申しあげます。

なお、以上の話の内容にはこれまでも触れたことが少なくない。「二、石棺出現の背景」は、「大王の棺」『仁徳陵古墳の時代』(『大阪府立近つ飛鳥博物館図録』八)一九九六年に簡略に触れたことがあるが、全体に内容を充実させ、「(二)不朽の『閉ざされた棺』」は内容を修正した。「(三)石工技術の伝来」は、「石工技術」『古墳時代の研究』第五巻、雄山閣、一九九一年、「(四)『据えつける棺』」は「棺と古墳祭祀」『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』、『立命館文学』第五四二号、一九九五年に詳しい。参照していただければ幸いである。

## 注

- 1 黄晓芬『中国古代葬制の伝統と変革』勉誠出版、二〇〇〇年、二七五頁。
- 2 水野正好「埴輪体系の把握」『古代史発掘』第七巻、講談社、一九七四年、一三七頁。

## 図版引用文献

- 図1・『岩波日本史辞典』一九九九年。図2・3・和田一九九一。図4・大阪府教育委員会『三ツ塚古墳発掘調査概要』一九八二年。図5・大阪文化財センター『瓜生堂』一九八〇年。図6・熊本県教育委員会『熊本県装飾古墳総合調査報告』(『熊本県文化財調査報告』第六八集)一九八四年。

(本学文学部教授)